2012年11月　第41号

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会第22回学術集会を終えて

学会長　白畑 範子
（岩手県立大学看護学部）

全国的に猛暑が続く日々のなか、やや涼しく感じられた盛岡市で、７月21日（土）、22日（日）、第22回学術集会を開催することができました。事前登録参加者が予定の６割にも満たない状況であり、「節約学会としながらも参加された方々にとっては来て良かったと思ってもらえる学会に」と覚悟をもしましたが、当日参加者に支えられ、当初の予定を超える参加数を得ることができました。盛岡市は東北地方の北に位置し、航空便も少なく、遠方から参加された方にとりましてはかなりの不便さもあったかと思います。そのような状況で参加していただきありがとうございました。

今回はメインテーマを『どこにいても子どもと家族に確かなケアを』としました。小児医療を担う医師や看護職などの不足や偏在が課題とされていますが、そのような状況においても、子どもや家族が、「どこにいても」、その時々の状況や生活の中でのニーズに即した根拠ある「確かな」なケアがうけられることが大切です。しかし、財政やマンパワー等の課題があるなかで常に子どもと家族のみ、あるいは子どもと家族を一番に考えることには限界があります。昨年の３．11の東日本大震災においてもそうでしたが、災害時など通常の医療やケアを提供できない現状ではその場の状況に合わせた最適な医療や柔軟なケアが求められ、看護の専門性を問わず、どの看護者も子どもと家族に向きあうことや各専門職の協働による Shared Care が重要となります。このことは、地方都市のみならず、全国的な課題であると考えテーマとしました。

シンポジウムでは、地域の力を活用しながら地域で子どもを看ていく、大人と子どもも併せて看ていく、その効果と子どもや家族が生活する場での柔軟な支援や災害時など通常の医療やケアを提供できないときの取り組みなどを紹介していただき、活発な意見交換がなされました。より高度な活動ができるための小児看護の専門性を高めるということとともに、看護の中での小児看護の裾の広がりに着目し、在宅ケア推進や今後の医療体制を考慮したこれからのケアネットワークのあり方、展望への示唆をいただきました。

テーマセッション

懇親会

特別講演では、大震災の大津波で甚大な被害をうけた釜石市において、震災前から子どもたちに防災教育をされてきた片田敏孝先生から、災害危機時での人の考え方や行動と想定に捉われないというリスクマネージメントや子どもが家族を動かす、変えることができるという子どもの力についてお話をいただき、子どものエンパワメントへの関りの重要性と可能性について強く再認識しました。さらに教育講演では、青木省三先生から正確な言葉のキャッチボールや子どもの病状や病名にとらわれず、子どもの心や子どもの主観的体験について目を向ける大切さについてお話をいただきました。また口演が60題、示説が77題とテーマセッションは７テーマ、エキスパートパネル・ワークショップが４テーマと例年より多くのセッション数となり、各セッションは200名前後の参加者で埋まり、学術集会が活発な実践活動の情報共有の場と成り得ていることをあらためて実感し、研修機会が得づらい地方の看護職にとっても貴重な体験となり、多くの収穫が得られたと思われます。

今回は学会員の少ない開催地でしたので、企画においては、宮城県、千葉県の学会員の方々のお力添えのもと、遠隔での会議を中心とし進めました。多くの皆様の多大なご支援やご協力があったからこそ開催できたと思います。また当日におきましても多くの皆様からのご声援もいただきました。心より感謝を申し上げます。

日本小児看護学会第22回学術集会に参加して

■ 伊藤　悠真（札幌医科大学付属病院）

私は看護師１年目ですが、日本小児看護学会第22回学術集会の開催にあたり、一般演題の示説発表をさせていただきました。初めての学会参加であり、全てが新鮮で戸惑う事の方が多かったのですが、様々な発表や意見に触れ、未熟なりに考えさせられました。特に今回の学術集会のテーマは「どこにいても子どもと家族に確かなケアを」であり、「確かなケア」とは何か、今までの自分は「確かなケア」ができていたのかなど、自分の看護を振り返るきっかけにもなりました。それらは今回の学会に参加したことの意義であり、今後看護師としてさらに成長するための支えになるものと思い、ここにその学びを記していきたいと思います。

会長講演「子どもと家族にとっての『確かなケア』とは」では、小児医療の地域間格差がある現状で、どこにいても子どもや家族が「確か」と感じるケアを受けられることが大切であること、そのためには、ケアを提供する看護師が子どもと家族にとっての確かなケアを提供できる、できていると思えることが必要ということが謳われていました。しかし、いざ、自分自身に当てはめ、振り返ってみると、果たして全ての子ども・家族が「確か」と思えるケアを自分が提供できていたのか疑問でした。やはり業務に追われ多忙となる時ほど、ケアの説明が簡略となったり、ケア自体に集中してしまい、子ども・家族がどのようにケアを受け止めていたのかなど考える余裕はなかったように思います。その背景としては、看護師としての経験不足もありますが、業務ばかりに目が向き、子ども・家族への関心が欠けていたのでしょう。子ども・家族が「確か」と感じるケアを実践するには、どんな場面においても、相手への思いやりを持って関わることが大切と改めて感じました。

最後に、「パンフレットで親から予防接種の説明を受ける１歳６カ月から３歳の子どもの反応」というテーマで示説発表をさせていただいことについて述べていきます。初めての発表でしたが、当初の想定より多くの人に研究を観ていただき、また様々な切り口の意見や質問をいただきました。このことからプレパレーションへの関心が普及してきていることを実際に感じました。また自分の気付かなかった角度から考えることで新たに疑問となったり、他の施設ではどのような反応が得られているかなど知る事が出来たり、積極的な意見交換をしていくことの重要性を学びました。

今回の学会参加では、講演やセッションなどを通し、様々な意見・考えに触れ、自分の看護を見つめなおすことができました。ここで考えたことは、実践の場に生かし、看護師としてのセンスを磨いていきたいと思います。

国際学会参加報告

■ 国際交流委員会委員長　中村　由美子

９月８日から12日にマレーシアで開催された“14th Asia Pacific Congress of Pediatric & 4th Asia Pacific Congresso f Pediatric Nursing”に国際交流委員会委員長として参加しました。本学会もメンバーとなっている“Asia Pacific Paediatric Nurses Association（APPNA）”の発会式も、学術集会３日目である９月10日に、大会長の Zulkifli Ismail 氏を迎えて盛会に行われました。日本からは、本学会の会員７名が学術集会に参加し、ベストポスター９組のうち２組が本学会会員でした。表彰された方はよい経験になったと話され、また、私にとっても、表彰された２名の方と一緒に喜びを分かち合えたことは、大変嬉しいことでした。３年後の2015年はインドで開催されます。是非、会員の皆様も海外の学会に奮ってご参加ください。

ベストポスター賞受賞　平賀紀子さん
（筑波大学大学院人間総合科学研究科看護学専攻博士（後期）課程・茨城県立こども病院）

発会式にて中村国際交流委員会委員長

「リレートーク」片田範子さん

自己紹介

生まれは岩手、育ちは東京の北多摩郡、隣近所に子どもがいるところで育ちました。高校３年の時に家族が渡米する決断をしました。母の後日談では、この決断は家族会議で決めたということです。私は日本で大学受験の時期でしたので、これ幸いに渡米に賛成した模様です。渡航先はテキサスの大学町、私の貧弱な知識で想像できたのは、高校へ馬で通えるかもしれない！ということでした。そんなこんなで、その後テキサスで下宿生活８年半、それから日本に単身で帰国し、９年経って、再度カリフォルニア大学サンフランシスコ校へ出向き博士をとって、看護教員の道を進みました。

看護師になったきっかけ

中学・高校の時から、看護師になると言っていました。何故かは分かりません。口にする度に反対されることが私の方向性を定めたようです。看護学部に入学し、選択科目（音楽）を履修していたときに、専攻変更を勧められ、「便器を運んでいるよりはやりがいがあるよ」の一言に、きっぱり音楽を捨てました。各教科５cm 以上ある教科書を読むことは当然で、実習前の図書館での資料探し、授業で聞きにくい英語を自室に戻って書き直し、辞書を引いて文脈の中で理解することの繰り返しでした。しかし、そうすると知識が身についていくのです。時間を使いさえすれば出来るんだという実感は大学の１年から２年の夏休みに見つけた喜びでした。

小児看護の出会い

子どもとともにいることが自然だったのが原因でしょうか。あまり迷うことなく小児専門病院へ就職していました。小学校か中学の時の夏休み、巡回映画を小学校の校庭で見ていたとき、自然に近所の子どもが膝の上にのって寝ていたのが、原点なのかもしれません。そんな状況で小児看護に入ってしまった最初の体験は、準夜勤専従だったこともあり、新米でも正看護師はリーダーをやることでした。新米のリーダーのもとで働くことは経験の長い准看護師の方々には試練だろうと思いながらも、１年後には「良く耐えた」と認めて貰えました。その時の子ども達の顔や様子は話し始めたら無く長くなりそうなので、やめますが、働くことのおもしろさは、自分が学んだことを実践出来ることの嬉しさでした。

私の日本での小児看護との出会いは聖路加国際病院での新生児室で始まりました。修士を終わった看護師が米国から来るらしい、さて、どこが一番無難なのかということで、配属が決まったようです。小児病棟に転属になって１年が経とうという頃、聖路加看護大学小児看護学教授の常葉先生が、台湾料理のお店で大学で教えてみないかと誘ってくださいました。事実上の転職はそれから１年後になります。病院で教育・管理部門に入るか、大学で小児看護に関わり続けるかの選択でした。

小児看護の魅力

看護の原点を有していることだと思います。大人とは異なった方法やレベルで思いを伝えることが出来る人、思考と行動の連携が容易く見破れない人、年齢が発達の状態を示すとは限らない人、こちらの思いを分かろうとしている人、自分で出来ることの可能性がどこにあるのかがつかみにくそうな人など、子どもとの対応で遭遇します。これらは人としての個別性の縮図であり、看護者として人々の尊厳をまもり、真摯に向かい合うことの基本を、子どもへ実践出来るかが問われることだと思うからです。

ストレス解消法

今も昔も湯と食です。これはリラックス法です。ストレス解消法は前向きに出てくる課題にタックルすることのようです。そうしないと、むずむず感は消えません。

後輩達への期待

看護するときに子どもを人として尊び、親を親として暖かく尊敬することでしょうか。社会で一番虐げられやすい対象を看護する人たちとして、社会の動きに敏感であり、仲間を作り社会問題について自分一人でなし得ること以上に発言し、行為することを恐れない人たちになって欲しいと思います。子どもが幸せな国はきっと大人も幸せであると思います。自分が幸せになる努力を追求することもその一歩でしょう。まだまだ、それには遠い社会です。

バトンを受けて欲しい人 筒井真優美さん

委員会活動紹介　健やか親子21推進事業委員会

委員長：二宮啓子
委　員：内正子、勝田仁美、辻佐恵子、奈良間美保、松森直美

健やか親子21推進事業委員会は、子どもの健康増進に寄与するために、「健やか親子21」を推進する活動を通して、社会並びに会員に貢献する役割を担っています。「健やか親子21」は21世紀の母子保健の取り組みの方向性を示し、関係機関・団体が一体となって推進する国民運動です。当初は2001年から2010年までの10年間の計画でしたが、４年間延期され、2014年までになりました。

本委員会は、「健やか親子21推進協議会」の加盟団体として、関連機関・団体との意見交換や、幹事団体として第３課題の「小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備」に取り組んでいます。

今期の委員会になって３年目に入り、健やか親子21の推進活動も終盤にさしかかってきました。これまでの２年間の活動では、主に３つの活動を行ってきました。①特別支援学校の看護師への支援活動として、「特別支援学校で医療的ケアを必要とする子どもの安全性を保障する看護師の配置に関する政策提言」（平成23年２月）、「医療的ケアを必要とする子どもへの支援における特別支援学校等での看護師のあり方についての提言」（平成24年５月）、日本小児神経学会主催の医療的ケア研修セミナーへの共催を行ってきました。②子どもの権利を保障する病院環境への啓発活動として、「子どもの人権は守られていますか？」のポスターを作成し、会員の皆様にも配布しました。③子どもの事故防止のための家族への啓発活動として、「子どもの事故防止ノート」を作成し、ホームページに掲載しました。詳細はホームページを是非ご覧ください。今年度は、継続している活動を行うと共に、これまでに行ってきた活動の評価と今後の学会に期待される活動についてのアンケート調査を実施し、今後の学会活動の方向性を見いだしたいと考えています。皆様、アンケート調査にご協力をよろしくお願いいたします。

日本小児看護学会　第23回学術集会ご案内

学術集会テーマ：子どもと家族の力を支える　倫理的判断にもとづく小児看護の創造

【会　　期】2013年７月13日(土)～14日(日)
【会　　場】高知市文化プラザかるぽーと
【演題募集期間】2013年１月８日(火) 正午～2013年２月18日(月) 正午
【参 加 費 用】事前登録：会　員　　9,000円、非会員　10,000円、学生（大学院生を除く）　3,000円
当日登録：会　員　11,000円、非会員　12,000円、学生（大学院生を除く）　3,000円
【プ ロ グ ラ ム】

会長講演：子どもと家族の力を支える小児看護をめざして－子どもの権利と家族の権利を擁護する－（仮）
中野　綾美（高知県立大学看護学部　教授）

特別講演：医療の中で命と向き合いながら考える　子どもの最善の利益
玉井真理子（信州大学医学部保健学科　准教授）

教育講演：小児看護を創る　子どもが子どもらしく生きることができる社会づくり（仮）
片田　範子（兵庫県立大学看護学部　教授）

シンポジウム：子どもがその子らしく生活するためのチームアプローチの創造（仮）

テーマセッション（仮テーマ）：
- 小児慢性疾患を持つ子どもの学校・家庭・地域との連携－小児糖尿病を理解してもらうための取り組み－
- 事例検討を通した子どもと家族の力を支える看護の共有
- 家族エンパワーメントの視点から子どもと家族の力を支える実践知
- 子どもと家族の力を支える外来看護の可能性－外来看護で看護師が子どもや家族のためにできること－
- 退院した医療的ケアが必要な子どもは学校でどのように過ごしているの？
- プレパレーションを行った子どもの反応を看護師はどのようにみているのか、ケースを通して考えてみよう
- 投稿論文はじめの一歩パート２
- 子どもの臓器移植に関して　・診療報酬に関して　・在宅看護に関して　他

エキスパートパネル
その他：一般演題発表（口演・示説）、ナーシングサイエンスカフェ、懇親会

【第23回学術集会 URL】http://www.jschn23.com
【事　務　局】学術的なお問い合わせ：〒781-8515　高知県高知市池2751-1
高知県立大学 看護学部　jschn23@cc.u-kochi.ac.jp
演題登録、運営に関するお問い合わせ：〒780-0072　高知県高知市杉井流19-2
(株)歳時記屋　info@jschn23.com

第12回(2012年度)北陸地区地方会 開催案内

第12回「地方会」を2013年３月９日（土)、石川県立中央病院健康教育館（石川県金沢市）において開催予定です。

メインテーマは、「現場のニーズや小児看護スペシャリストの活動から考える看護の役割：これから私たちができること」と題して、専門看護師、認定看護師、チャイルド・ライフ・スペシャリスト等の方によるシンポジウムと、災害看護の講演(日本小児看護学会災害対策委員会との共催)を行います。実行委員長は石川県立看護大学の西村真実子氏です。詳細については、今後、学会ホームページなどでお知らせいたします。

皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

～ おめでとうございます ～

2011年度日本小児看護学会研究奨励賞受賞論文

2010年発行の日本小児看護学会誌19巻２号と３号、2011年発行の20巻１号に掲載された原著・研究報告論文17編の中から、選考の結果、下記の１編が受賞されました。(学術交流推進活動委員会)

小泉麗（2010)：重症心身障害児の胃瘻造設に関する母親の意思決定過程の構造化．日本小児看護学会誌．19(3)．1-8.

◆ 編 集 後 記 ◆

日本小児看護学会ニュースレター第41号をお届けいたします。

今号には、７月に盛岡で開催されました第22回学術集会の報告を掲載致しました。第22回学術集会の情報については、４月に開設した『日本小児看護学会会員専用 SNS』においても、エキスパートパネルのまとめやテーマセッションでの報告内容などが一部公開されております。この機会にぜひ会員専用 SNS へご登録頂き、会員間の情報共有・情報交換や、ネットワークづくりにつなげて頂ければ幸いです。

また７月中旬に学会 HP をリニューアル致しました。多くの皆様に活用して頂ける HP づくりを目指しておりますので、お気付きのことがありましたらぜひ広報委員会までご意見をお寄せください。

広報委員会メンバー
委員長：武田淳子
委　員：塩飽　仁，白畑範子，今野美紀，
遠藤芳子，大池真樹